

朝鮮戦争における国連軍の性暴行と売春

崔吉城

はじめに

アフリカのグシイ社会では不貞の妻は超自然的制裁の災いを受けたり、病気になるというが、未婚の女と寝る分には、相手が何人だろうと心配はいらないという（松園、1993：49）。ケニア・ギリアマ社会では近親性交のタブー、配偶者以外の性関係はタブーであり、それを犯したら嘔吐、下痢などが起こるといふ（上田、1993：57-75）。どの社会においても程度の差はあるにしても夫婦以外の性を禁ずる掟か、法律か、モラルがある。それは結婚の定義にも繋がる。

韓国社会では近親相姦のタブーや婚外性交の禁止が厳しい。特に伝統社会では、女性は夫婦の性においてさえ快樂はよくないとされていた。したがって、女性は快樂ぬきで、子供を産むべきであり、それが良妻である。しかし男性は性的快樂を求めてもよい仕組みになっており、男性のために売春は必要とされていた。

一般的に売春がなければ社会には強姦など性暴行が蔓延して性的に乱れるのではないだろうか、つまり売春は社会の安全ピンとして必要悪といわれている。例えば朝鮮戦争中に、性暴力から免れるためにA村で売春婦たちを入れた。彼女たちの中にはそのまま定着して住んでいる人もいる。また混血児を育てている人もいる。

戦時中の性暴行といっても、ただ性欲を満たすための暴行、性的な攻撃、特にその女性自身だけではなくむしろその女性の夫や家族、そして国家の名誉とプライドを辱めるために行なわれていたといわれている。つまり民族感情が爆発して敵国の女性に性暴行をすることもある（小田、1996：97-100）。フランス軍は戦争中、アルジェリアの男たちの名誉を失わせるため、多くの女性を強姦した（バリ、1984：205）。最近のセルビア軍によるボスニアのム

スレムとクロアチアへの組織的強姦は3万から5万ともいわれており、100人に1人は妊娠したと証言している

(<http://suc.org/politics/rape/html/marlino.html>)。

しかし朝鮮戦争の時には、国連軍が必ずしも敵の女性に敵意識を持って強姦したのではない。むしろ敵ではない韓国の女性への性暴行が主であった。それは戦争という狂気の状態のようなものによって説明できるであろう。「戦時中」、「交戦中」の作戦権、自己防衛権などは非戦中、休戦中、平和などとは対立する軍事的な概念である。最前線では警察はもちろん憲兵さえも治安に力が及ばない。軍人たちがもっとも自由な状況になる。人間の条件からも解放されて動物的になる状況かもしれない。それは狂気でもなく、正気でもない境界状況かも知れない。そのような状況の中で殺人、強姦などが起こりやすく、突発的にしろ組織的にしろレイプは多く、戦争には性暴行が「付きもの」だと一般的にいわれるのである。

スペイン人がメキシコを征服した時、ドイツの農民戦争の時、フランス植民地の時フランス軍がアルジェリア人に、7年戦争の時、第2次世界大戦の時、朝鮮戦争とベトナム戦争の時、国連軍（米軍）が韓国人やベトナム人に、最近ではユーゴスラビア民族紛争の時、セルビア軍がボスニア人に、もちろん厳しい軍律があったにもかかわらず（デュル、1997：406-420）兵士たちは多くの女性を強姦した。1992年夏、あるボスニア妊婦がセルビア軍兵士たちに強姦されて、腹を切り裂かれ、胎児が木に釘付けられたこともあった。

アジアの中でも韓国軍がベトナム人に、日本軍が朝鮮人や中国人に、インドネシア軍が中国人などに性暴行を犯した。特に日本軍による南京大虐殺と従軍慰安婦に関しては強姦や残酷な性暴行として有名である。韓国の国軍による自国民への性暴行も記憶に残っている。またベトナム戦争で米軍や韓国軍の残虐な強姦や殺人は問題にもなっている。Ahn Jung-Hyoはベトナム戦争体験に基づいて小説 *White Badge: A Novel of Korea* (New York: Soho Press, Inc., 1989) と映画で主人公が戦争中起こる殺人や強姦などの状況で精神異常になり自殺する内容を描いている。つまり戦争が精神異常をひき出すほどの状況であることを表現しているのである。

オリバー・ストーン映画なども戦争と狂気、人間同士の殺戮と狂った世

界とはなにかを問題にする。「プラトーン PLATOON」(87 米/監督:オリバー・ストーン)はベトナム戦争に参加した若い大学出の主人公が様々な体験をし、成長する。この中でベトナム人の頭をかち割る惨たらしいシーンも、狂った世界を描いている。これが戦争なのだろう、平和とはなんだろうと訴える。実際米軍はベトナム戦争で女性の膣に棒を押し込み殺すこともあった(デユル、1997:220)。1979 年作 米/フランス・フォード・ Coppola の「地獄の黙示録」も戦争と狂気を描く傑作である。この作品で戦争や侵略という巨大な暴力を背景に殺人や性暴行が行われたと訴えている。

上述したように戦争中といってもすべての軍隊が性暴行を犯すわけではない。中国人民解放軍は韓国人に性暴行を全然しなかった。私は朝鮮戦争の時、中国の軍隊が性暴行をまったくしなかったことを体験的に知っている。それは軍の性を管理する政策と関わるものなのかもしれない。中国の人民解放軍は朝鮮戦争の時に韓国人女性に、終戦の時に日本人女性に対しても強姦などの性暴行はなかったという。

中国人民解放軍は性暴行などの不名誉なことはしなかった。三大規律の一つは「民衆からは糸一本針一本とってはならない」また八項の注意の一つに「婦人をからかわない」(平松、1987:13)という規律があるからとも考えられる。これは戦争が必ずしも狂気にはならないということの可能性を示すものである。

一. 朝鮮戦争と性暴行

韓国ソウル北方、東豆川と議政府の間にある A 村は儒教的な倫理が強い村であって、戦争前までは村の中の恋愛も異様な事件となったが、朝鮮戦争中の約 1 年間は基地村であった。この村の A 女はソウルに通う大学生と恋愛することが村人に知られた。それが村会で議論になった。その議論の中で彼女の従兄が親族の侮辱と感じ、棒をもって走って行き彼女を殴って血を流した事件があった。その後 A 村は朝鮮戦争中、3 ヶ月間朝鮮民主主義人民共和国の統治下になり、彼女の恋人は共産主義者になった。彼女との恋愛は問題にされず、二人の関係は黙認された。1951 年 3 月に国連軍によって A 村は北朝鮮体制から解放された。住民たちは国連軍を歓迎した。しかし兵士の中に

は女性に性暴行をする人もいた。国連軍は平和軍であり、また恐怖の存在でもあった。長くて2ヶ月、少なくとも1ヶ月はこのような状況であった。

激戦の交戦部隊が通過した直後、国連軍は村の若い女性を奇襲して性暴行を行った。主に米軍とイギリス軍人によるものであった。若い女性は米軍の性暴行を避けて他の村に逃げて隠れた。日中数人の白人兵士がシェパードを連れて女性を捜し歩いた。コミュニケーションも出来ず、村人が恐怖感をもって集まって見ていると、兵士たちはそのまま帰った。しかしその晩、隣の村で黒人と白人が強姦するのを見て村人が彼等を農機具で殺害した事件が起きた。こうしてますます村人は国連軍を恐れるようになっていた。

そんなある日の夕方、イギリス憲兵（赤い線の付いている帽子を被った）のジープが突然隣の庭に止まった。夕食中の家族はびっくりし、未婚の娘は押し入れの中に隠れた。その家に若い娘がいると確信した二人の軍人は早速その家の外側の周りを調べてから建物のなかの台所や板の間を覗き、一人は部屋に入り、一人は見張りをしていた。部屋から悲鳴が聞こえた。その時彼女の祖母が農機具を持って入って板の間を叩き、脅迫した。兵士たちは慌ただしくジープに乗って逃げて、強姦は未遂に終わった。

ある若い女性は白いタオルを被って子供を負い、既婚女性のふりをしたりしていたが、畑で仕事に兵士たちがジープに乗せて連れ去り、（性暴行されて）数日後、戻された。若い女性だけではなかった。ある10歳くらいの男の子は祖母とサツマイモ畑で仕事で米軍が性器を出して舐めるように強制し舐めたが性器を無理に口に入れたので喉が破裂したことがあった。このような性暴行は部隊の近いところや道路辺りで起こった。しかしどのくらい広く起きたかは確かめようがない。またその期間も長くなかった。なぜなら村に売春婦たちが入ることにより性暴行はなくなったからである。その時の事例は次の如くである。

A女は8人家族の長女である。その家族は終戦直後（1949年）北の全谷里（朝鮮戦争後は韓国）から38度線を越えて難民としてこの村に定着した。A村は20戸ほどの小さい農村である。その家族は親族が住んでいるこの村に、農地を若干買って住むようになった。祖父母、父母の直系家族、一男三女の

長女である。父は農作業が出来ず、よく酒を飲んで酔っ払っており、いわば酒乱だった。しかし母親は畑仕事も多少はしたが主にミシンを持って、裁縫で全家族の生計を立てていた。当時母親は村の他の女性に比べると新式の女性であった。村人からは開化された女性として、少し変わった人だと思われていた。

1950年6月25日朝鮮戦争が勃発し、9月まで3ヶ月間A村は朝鮮人民共和国になっており、A女の恋人は北朝鮮の共産党員として活躍した。A女は恋人のために内務所（面事務所）で働いた。9月マッカーサーの仁川上陸作戦が成功してソウルが復帰され、この村の近くに韓国軍の部隊が駐屯した。恋人は人民軍とともに北朝鮮へ逃げてしまった。

人民軍は隣村で韓国の軍人家族の9人全員を殺して逃げた。復帰した韓国側の軍人が家に帰って全家族が殺されたことを知り、共産主義者を探して殺す復讐行為が行われた。その時A女は韓国軍の取り締まりを受ける形で連行され集団暴行されたという。その後A女は村では結婚できずソウルに行き、ある人の後妻になったが子供に恵まれず養女を取ったが、夫は死亡し、現在一人暮らしをしている。

A女の妹のB女（1939年生）は朝鮮戦争後に米軍相手の慰安婦になった。その中で一人の米軍人と独占的な関係を持つ準結婚関係を持ち、ソウルで生活した。その間に混血男児が生まれた。当時は国際結婚が少なく、米軍との混血児は売春婦であったことの証明のようなものとして、恥ずかしいことであってもB女は息子を手放さず育てた。彼女の夫はアメリカに帰国し、年数回は間欠的に尋ねてきた。彼女は喫茶店を経営したが、数年前交通事故で死んだ。息子は差別されることから韓国社会が嫌でアメリカへ行ったが英語がわからず適応が難しく一度は韓国に戻ってきたが結局はアメリカに移住した。

C女は再婚して得た一人娘がいたが、夫が経済的能力がないので自分自身が家計を立てなければならなかった。当時彼女は50歳で売春婦になった。彼女は年増の売春婦として有名であった。その噂は親族の耳にまで届いた。親族は恥ずかしいと怒っていても親族関係上シニアの彼女を叱ることは出来なかった。彼女は子供や家族のためには他に方法がなかったと堂々としてい

た。以上は A 村の女性である。

D 女は 30 歳過ぎの売春婦としてこの村に入った。不美人であったのでなかなか米軍が相手にしてくれなかった。しかし彼女はすぐ妊娠してしまった。出産が近くなって売春も出来ない時は村人に依存せざるを得なかった。出産してからは売春せずこの村で貧乏暮らしをしながらもその混血の男児を育てた。村人は彼女が売春婦であるからといって特に差別はしなかったのである。貧しい暮らしであったが、売春の証明的存在であった息子の成長だけが彼女の喜びと希望であった。彼女にとって恥ずかしいということは二の次であった。

E 女も 30 歳過ぎで売春婦としてソウルから村へ来た。彼女は村で間借りをして売春を始めた。彼女はその家の主婦に家庭の事情を説明して売春をせざるを得ないことを納得してもらった。そして間借りをしながら家族のように親しくなり、養女のように受け入れられた。売春婦としては長く出来ないことを知った彼女は米軍部隊が移動して村を離れた時はついて行かず村に残る決心をした。そして農地を買って夫を呼んで農業生活に転換した。村人は彼女を名前で呼ぶことを止めて擬似親族名称で呼ぶようになった。最近行った還暦のお祝いの時には大勢の人が参加したと聞いた。

F 女はソウルから来た女性である。米軍には人気のある女性であった。2,30 人の売春婦の中では英語力と貫禄のある女性であった。米軍が暴れたりすると解決する能力もあった。売春婦たちは彼女を「オヤカタ」という日本語で呼んだ。彼女は売春しながら、売春婦たちからものやドルを集めてソウルで売ったりした。秘密に軍のトラックを借りて乗客を乗せて運賃を取る商売をしたりして、お金を貯蓄して、ソウルには韓国式の家を買った。彼女は村から自分の子供の子守りや家事をしてくれる女中を連れて行った。

この A 村は米軍が駐屯することによって村は一変して売春村に変わった。つまり貞操を尊重してきた村が売春を許すようになったのである。この A 村の事例からいくつかのことが分かる。

第一に性暴行が多く起こる状況である。それは最前線での交戦中と治安が安定する時期の間の短い期間である。最前線で交戦中には生死の危険緊迫状

況であるので性暴行は起こりにくいようである。また警察によって治安が安定し、比較的社會が正常に戻ると性暴行はなくなり、売春に変わるのである。つまり性暴行は最前線のすぐ後ろ、治安回復の直前の時点に存在するのである。生命の危機感から安全への、戦争で生き残り勝利感のある時の完全に正常に戻る前である。酒酔いに比していうと完全に酔った状況ではなく正常の意識があるところでもない。正気と狂気の境界の領域といえる。地域的に言うとは非常に危険で、売春婦たちが入ってこないところで行われる。そこでは売春は成立しないからである。一般の女性が犠牲になる性暴行と売春は別のものである。つまり性暴行から売春に直接変わることはない。村人が暴行され、売春婦になった事例はない。村人が売春婦になったが他の地域で行っており、村と直接的に結びつかない。戦争の状況の変化によって性暴行から売春に変わったのである。

第二に、村人は性暴行へ対応するために売春婦になったとか、連れてきたわけではない。例外を除いては村人が売春に通ったこともない。ただ村に米軍が駐屯し、国連軍による性暴行者が多くなり、戦争と性暴行の両面から恐怖感の高い状況の最中に若い売春婦たちが多く村を尋ねてきて、彼女たちによって救われたのである。そうでもしなかったら村の女性は全部性暴行される恐れを感じたので、村人は彼女たちを歓迎したのである。まるで彼女たちが村の救い主のように迎えられた。住民たちは戦争中一時的ではあるが性暴行や性犯罪を防ぐために伝統的な儒教の性倫理を弱めて、売春を認め正当化したのである。

第三には性暴行を免れるために村の人々は売春を歓迎した。つまり村が売春を認めるようになった。儒教的なモラルから考えると売春婦を村におくことは許されない。しかし儒教が韓国社會に深く定着していないためか、あるいは戦争という不可抗力によってそのように変わったのであろう。だが一方では倫理的に貞操を守るために売春を認めるようになったという合理化が可能であった。一方で売春が非倫理的といいながら一方では倫理性も持つのである。売春は親孝行や家族への献身などによっては肯定的に評価される。Chul-In Yoo はスンヒという女性が兄弟の学費のために売春婦として働き、そしてアメリカ人と結婚したライフヒストリーを正当化することを論じた

(Yoo, 1995 : 11-22)。

戦争の交戦という状況では軍人だけではなく、一般人も正常ではないようである。性を最低の資本として売り物にもしたのである。性を売ることは特殊な人のだけではなく、状況によっては誰でもなりうるということである。村人は売春婦たちに部屋を貸して収入も得られるし、村人を性的に安全に守ることもでき、一石二鳥と考えた。そして伝統的な儒教倫理を持つ村が一瞬にて米軍基地村化して従軍慰安婦、売春婦に依存するようになったのである。

第四に、売春は性暴行を防ぐものだけではなく、資本化が可能だということが分かった。結局村人は性暴行を逃れるために売春を歓迎し、それを資本化したのである。そのような現象はA村だけではなく、駐屯基地村の存在意味とも繋がると思われる。売春婦は基地村では性暴行が起こるかもしれないという安全ピンとしての存在でありながら性を資本化しているのである。

また性の逸脱ばかりではなく売春が結婚への道をも提供することになるが、特に貞操を尊重する韓国社会においてそれを失い結婚が難しくなった人が(売春婦を含む)日本やアメリカなどの外国へ結婚を求める傾向があり、性的に海外へ流れる傾向がある。そして基地村には売春婦が半公娼的に存在する。戦争を通して売春婦が多く創出されるのはこのような状況から理解できる。現在韓国では専業売春婦が100万人を超えているという。ベトナム戦争後50万人の売春婦が創出されたという(申、1997:26)。

第五に、売春婦に対する否定的な態度、差別がほぼないことである。その状況への相互理解から来たものと思われる。見えない弱点を探して差別する日本の差別構造とは異なって弱点を隠してあげて普通の付き合いをしていたことが分かる。

二. 国家の性の政治

性は性暴行を予防することから性拷問までいろいろな場面において利用されている。特に国家は政策的に利用しているといえる。最近の従軍慰安婦の問題は韓国人全体の貞操が日本人によって犯されたように強い反日的な感情と態度を持つのはその表われであろう。これを大きく二つに分けて考察してみたい。一つはナショナルアイデンティティと外交政策の側面である。もう

一つは経済的政策である。

(1) 貞操とナショナルアイデンティティ

李朝時代には根強い儒教的女性観で女性の貞節観が社会的に強く要求され、『飢餓は極小事、貞節は極大事』であり、女性は一度結婚するともう二度と結婚はできず、未亡人は夫のお墓の横で生活することもあった。倭敵（日本軍）が攻め入って来た時、ある女性は逃げるために船に乗った。その時船頭が手をさしのべて乗せたがその女性は夫ではない男性の手に触れたことだけで、それは強姦されたのと同じと思い、川に身投げ自殺したという話がある。豊臣秀吉の朝鮮出兵の時は貞操を守るために自殺した女性も多いという。中学・高校の家政科の先生たちは結婚する前に性関係を持つということは生命を失うのと同じと純潔意識を教育していたという（韓、ホームページ参照）。

1940年から45年大東亜戦争期に韓国の女性が「従軍慰安婦」にされたということは民俗的羞恥であるのは当然であろう。彼女たちは恥ずかしく思い、戦後になっても本国に帰れず、性的墮落者として隠れていた。恥ずかしさと罪の意識にさいなまれ、どうしても家族に顔を合わせることができなかったのである。彼女たちはこれを社会問題化しようとは考えなかった。しかし日本帝国は終戦の時、証拠物を焼却し、米国の占領軍が戦争犯を軽く扱ったこと、そして当事者たちの恥ずかしさと罪意識のため社会的問題になりにくかったので戦後半世紀まで慰安婦問題が出なかったのである。そしてこの問題は歴史の中に埋もれてしまいそうであった。従軍慰安婦が隠したとすればそれは隠しただけではなく、その時代のこととして忘れたかったのかもしれない。もちろん不幸な事実が完全に消されるとは思わなくとも、個人や住民たちはその傷を問題にしていなかったのであろう。それは単純に恥ずかしさで説明し尽くすことは出来ないことであろう。

最近彼女たちは公に身を現わし、社会の表面に出るようになった。それはなぜであろうか。第一に日本の戦争処理の政策とも関係がある。強制連行された人たちが賠償金を要求する訴訟を行ったりしている社会的状況に変わった。彼女たちも戦後処理をきちんと欲しいと願っているようである（映画：ナヌムの家）。

第二は人権思想が高まり、米軍による性暴行や非人権的な扱いが問題にされるようになった。韓国女性の人権を守る団体のサポートがあった。ハルモニ（おばあさん）たちは人権運動者の指示を得ながらマスコミの前で『自分たちはもう死ぬ歳なのでお金の問題ではない。ただ踏みにじられた名誉、尊厳を回復する事だけが望みだ。日本政府は公式的な謝罪と賠償をして早く私たちの名誉を回復してくれるべきだ』という。彼女たちは歴史の最悪の犠牲者と愛国女性といわれている。

第三は日韓関係がギクシャクするたびに反日感情が増幅することと関連する。韓国の女性の処女性格が日本の軍隊によって奪われて国民全体の恥だという言説が作られたのである。韓国政府やマスコミなどは日本植民地遺産として従軍慰安婦を問題にしている。韓国のマスコミなどはほぼ資料提供もできず慰安婦たちの恥がすなわち韓国人全体の恥であるといい、日本は非人間的だと攻撃し、慰安婦という本質を論せずただ反日感情を扇ぐのに熱心である（Yang, 1998 : 123-135）。時には慰安婦が民族の恥辱として語られており民族的犠牲者や愛国者という名分が与えられたりする。戦前の従軍慰安婦は国連連合軍や米軍による性暴行や売春に比べものにならないほど悪いという。つまり従軍慰安婦に対しても蔑視と尊敬の両面性がある。日本植民地遺産として従軍慰安婦も政治的な民族主義に利用されるようになった。ヨーロッパや日本の女性たちも参加して妓生観光追放運動を行い、効果を得たというが、これによって反日感情が高まり日韓関係が悪くなったこともあった。

（2）経済的政策と外交政策

軍隊による強姦（rape）や売春（prostitution）は常にある現象とはいっても様なものではない。軍隊の強姦や売春はその国家の軍隊の政策と被害国側の態度などによってその様子が異なることが分かる。米軍は朝鮮戦争で恩恵深い友好軍であり、その駐屯は朝鮮半島の安全保障の象徴的な存在である。日本に駐屯している米軍より韓国に駐屯する米軍の周りに売春が盛況している。それはアメリカの外交によって異なり、特徴づけられるという。

Katharine H.S. Moonはその点について鋭く分析する。彼は米軍の売春は米韓両国の政策であることを明らかにした。戦後韓国駐屯の米軍は売春につ

いては自由であり、法律的な制約もあまりなかったという。韓国政府は米軍基地売春婦たちが米軍の性的欲求を満足させて、志気を上昇させ、また朝鮮半島の安全保障をしてくれるという意味で、ある意味では彼女たちは愛国的行為をするとも考えていたようである。そして米軍の売春倫理と性病などは基本的にはアメリカ側の問題であるとし、積極的に否定的な政策は取らなかった。日本植民地時代の従軍慰安婦は組織的に強制したのに比べて米軍の売春は恣意的であるという考え方がある (Moon, 1998 : 167,143,147)。つまり彼らが安全を守ったことに対して命より尊い貞操をあげたということになる。韓米行政協定により韓国人が被害を受け、殺されても米軍兵士を韓国で裁判することができなかった。

韓国では妓生をカルボ、米軍相手の売春婦をヤン (洋) カルボと蔑視する。一方では洋公主 (西洋の王女 western princess) と呼ぶ。つまり売春婦 (カルボ) と王女という両面を持つ。売春婦は外貨を稼ぐ祖国近代化の役軍としても愛国者になる。1970年代で朴正熙政権は経済開発のもとで妓生観光を奨励した。公娼は法律的に禁止されているが、形式的に禁止されているだけで米軍の売春については積極的に批判する政策は取っておらず、黙認し、助長している。政府は観光振興法に基づいて国際観光協会に料亭科を設置し、妓生として接客員証明書を持った女性が合法的に営業をした。特に日本人男性が多く利用するようになった。これは韓国人のプライドを傷付け、日本の観光客をセックスアニマルといい (朴, 1994 : 123-155)、政府は離農した女性、失業した女性たちを集めて「あなたたちは愛国者だ」といい、素養教育をした。12時以降の通行禁止時間でも彼女たちは例外であった。本格的な資本主義経済が進行するように、外貨を稼ぐ政策をとったので時として売春は愛国行為ともいわれた。

米軍相手の売春婦は戦後40年間において25万から30万人に増加した (朴, 1994 : 83-92)。3万7千人の米兵が96か所の地域で8千万坪の土地を占有している。「駐韓米軍の90%は非道徳的な性生活におぼれている」「6・25戦争以後、外国軍人の70%が性病・麻薬中毒者」「米国社会の病理の温床」と指摘している。米軍側は韓国政府の手厚い援護のもと、韓米行政協定をたてに犯人の拘束を3年間行わなかった。米軍の性暴行や売春について韓国政

府はもちろんナショナリストやフェミニストも問題にしなかった。それは韓国政府の近代化と韓米関係の友好関係の維持という政策によるものであったからである。

基地村での性暴行が間歇的に報道されても、社会的問題になったことはほぼなかった。したがって米軍による非人権的な事件も社会的に大きく問題になったことがほぼなかった。つまり韓米行政協定により韓国人が被害を受け、殺されても米軍兵士を韓国で裁判することができなかった。基地村売春は韓米友好関係に利用したともいわれる。しかし人権思想や民族主義が高調するにしたがって米軍の性暴行などに批判的反米主義が起きた。ナムジョンヒョンの小説「糞地」は「韓国の地は米帝国主義の糞で汚された地である」というように韓国における米国の犯罪性は現在も解消されていないばかりでなく、拡大再生産されている。基地は性暴力の温床であり、現在でも駐韓米軍の基地のあるところには、性暴力と殺人犯罪が多く起こっている。

1999年1月27日、米第8軍情報局ジェイムス・ウィリアム(37才)がソウル市内に住む妻のジョン・ジナさん(42才)と息子のイ・ボビー君(4才)を殺害した後、死体を燃やした。また1月30日、東豆川市の基地村ではシンさん(45才)が自宅で首に電線を巻かれ、裸のままベッドで死んでいるのを同僚が発見した。シンさんは十四年前から、米軍兵を相手に売春をしており、近所の人の証言によると前日、米兵士がシンさん宅にいたという。70年代に入ってから時々米軍の性問題が社会問題化した。それはある女性の飛び降り自殺で社会問題になった。その女性は「煙草の火を全身につけられ、もう我慢できない」という遺書を残して自殺した。女性団体は相談電話を設け、調査を始め、韓国内だけでなく国際世論化しようとそれをテーマとして演劇公演もした。

その中で尹今伊の被殺事件が一番大きい波紋を呼んだ。米軍クラブの従業員だった尹今伊は1992年10月米軍人Kenneth Markleによって殺された。子宮にはコーラのびんが突っ込まれ、肛門に傘が突き刺さり、全身に生傷がある状態で残忍な暴行を隠すかのように全身に洗剤の粉がばらまかれて発見された。尹今伊殺人事件が一つ契機になり、1980年代以後フェミニズムの上昇によって女性の人権が意識される中、尹今伊の被殺事件が反米運動にまで

拡大された。

フェミニストたちは米軍基地周辺の女性たちこそ性の被害者であるというように表現した。女性団体、キリスト教団体などが連帯してこの問題を社会問題化した。ある女性団体はクリントン大統領に『駐韓米軍は韓国で毎年 2 千余件の犯罪を起こしています。その犯罪の根本的な解決のためにも韓米行政協定の改正を含めて犯罪の根絶の対策を要求します』と請願した。沖縄の事件についてはクリントン大統領が謝罪をしたが、韓国でははるかに多くて残忍な事件が多発しているにも関わらずアメリカからは何の態度表明もないという不満を訴えた（韓、同上）。

米軍駐屯半世紀を経て、尹さんの事件を契機に無言の抗議を超えて、民衆の怒りが爆発するかのように「駐韓米軍の尹今伊さん殺害事件共同対策委員会」が設立された。その後、常設的な組織の必要性から 1 周忌を前に女性団体などを中心に「駐韓米軍犯罪根絶運動本部」がついに結成された。尹今伊事件を忘れないように 1998 年 10 月 25 日、韓国の民主女性会は「駐韓米軍犯罪犠牲者追慕祭：尹今伊氏六周忌を追悼」を行った。

結論

本稿では第一に、強姦と売春との関係を考察した。戦争中ではあっても強姦と売春婦が直接的な関係には至っておらず、強姦という恐怖から解放されるためには売春が必要とされた状況について事例をもって述べた。売春、倫落行為は直接的に性暴行を防止することとは結びつかなくとも間接的には相互関係があると思われる。特に強姦が恐怖になり売春婦を歓迎することが確認できた。このような残酷な現象を予め防止しようとするのが売春ではなかろうか。したがって強姦は売春を存在させる重要な要因であることは間違いないことが分かった。戦争中一時的ではあるが、性暴行や性犯罪を防ぐために住民たちが売春を認め正当化し、それを積極的に収入源にした。それは基地村売春が半公娼的に存在するのと同様である。

第二に朝鮮戦争の時敵の女性への性暴行はあまり行われなかった。米軍が韓国女性へ、韓国軍が自国民の女性へ行った。また非常の時の強姦と売春は民族、人種を問わず起こっている。韓国軍の自国民女性への性暴行、性拷問、

そして独裁政権の時多くの性拷問もあった。韓国軍隊の周辺にも売春婦たちはいる。主に軍人たちが利用する汽車の駅の周辺を中心に‘倫落街’が形成された。つい最近までソウル駅と清涼里駅の周辺には売春婦が密集した。このような事情は都会であれば全国的な現象であった。日本人が満州へ初期武装開拓移民として行った時や南京大虐殺の時に、中国人女性に強姦や残酷な性暴行を犯したこともあった。このような場合、必ずしも敵意識が性暴行と結びつくとは言えない。

第三に、性暴行が売春を正当化する。売春は性の逸脱ばかりではなく売春が結婚への道をも提供するようになる。朝鮮戦争の時多くの売春婦たちは国際結婚などを通してアメリカへ移住した。韓国ではじめの多くの国際結婚はこのような売春を通してであった。特に貞操を尊重する韓国社会においてそれを失い結婚が難しくなった人が（売春婦を含む）日本やアメリカなどの外国へ結婚を求める傾向があるのは現在でも同様である。皮肉にもそれは結婚という正道から逸脱した売春婦が国際結婚への先導になったのである。儒教的性モラルが逆に親孝行のためなどに売春も可能になり、貞操を守れなかった女性を国外に出すメカニズムになっている。

第四に、韓国はナショナルアイデンティティ、経済的、外交的な政策によって売春を黙認したり、あるいは積極的に利用したりした。それは政策と関係するといえる。つまり占領軍との摩擦をできるだけ少なくし、また占領軍によって必要以上に治安が乱されるのを未然に防止するための性的サービスが必要であるという。韓国の基地村売春を朝鮮戦争後 40 年間専業とした人口は 25 万から 30 万にもなるという。韓国では貞操に関する法、姦通罪などの刑法を以って儒教の性倫理を守ろうとしながら一方では売春を認める政策も取っている。

第五に、このように戦争中には強姦などの性暴行が起きたことは知られているが、これは平和のために戦争をする論理とは極端に矛盾する。もし戦争が平和のためにやるものならば最前線に立つ将兵たちは天使のような存在でなければならぬ。しかし戦争中は敵国や国内においても殺人や強姦は多く起こったのである。

文献

- 井上和枝 (1997) 「朝鮮」『アジア女性史』明石書店
- 上田富士子 (1993) 「ケニア・ギリアマ社会における性のタブーと病気」須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院
- 小田亮 (1996) 『性』三省堂
- 神崎清 (1955) 「基地売春」『売春』青木書店
- 韓明淑 「韓国社会の性暴力問題」
<http://www.osk.3web.ne.jp/~yeoseong/minju/m57/m57-3.htm>
- ギルモア著、芝絃子訳 (1996) 『攻撃の人類学』藤原書店
- 崔吉城 (1996) 「現代韓国社会における売春」「波市考」『韓国民俗への招待』風響社
- 崔吉城 (1998) 「韓国人の貞操観」諏訪春雄編『アジアの性』勉誠出版
- 崔吉城 (1998) 「朝鮮戦争と韓国社会の変化」『変貌する韓国社会』第一書房
- ヒックス、ジョージ著、浜田徹訳 (1995) 『性の奴隷：従軍慰安婦』三一書房
- 申恵秀著、金早雪訳 (1997) 『韓国風俗産業の政治経済学』新幹社
- 末成道男 (1985) 「人間関係」伊藤亜人編『もっと知りたい韓国』弘文堂
- 田中真砂子 (1989) 「文化人類学における性差研究」石川栄吉他編『家と女性』三省堂
- デュル、ハンス・ペーター著、藤代幸一・津山拓也訳 (1997) 『性と暴力の文化史』法政大学出版部
- バリ、キャスリ著、田中和子訳 (1984) 『性の植民地』時事通信社
- 平松茂雄 (1987) 『中国人民解放軍』岩波書店
- 松園万亀雄 (1993) 「アマサンギアまたは性の共有：グシイ社会における姦通と制裁」須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院
- 李効再 (1997) 「韓国の家父長制と女性」『アジア女性史』明石書店
- 박종성 (1994) 『한국의 매춘』인간사랑 (朴鐘晟『韓国の売春』インカンサラン)
- 우리사회연구회 (1994) 『성과 현대사회』파란나라 (ウリ社会研究会『性と現代社会』パランナラ)

- 李永愛 (1995) 『性・権力・政治』 法文社
- 조혜정 (1988) 『한국의 남성과 여성』 文学과知性社 (趙惠貞『韓国の男性と女性』 文学と知性社)
- 한국여성개발원 (1995) 『성폭력 상담의 실제』 (韓國女性開發院『性暴力相談の実際』)
- Day, Sophie (1994) *Sex and Violence*, Routledge.
- Killick, Andrew P. (1995) *The Penetrating Intellect, Taboo* eds. by Don Kulick & Margaret Wilson, Routledge.
- Malinowski, Bronislaw (1929) *The Sexual Life of Savages*, A Harvest/HBJ Book, (泉靖一他訳 (1999) 『未開人の性生活』 新泉社)
- Moon, Katharine H.S. (1998) *Military Prostitution in U.S.-Korea Relation*.
- Yang, Hyunah (1998) Remembering the Korean Military Comfort Women: Nationalism, Sexuality, and Silencing, *Dangerous Women*, eds. Elaine H. Kim and Choi Chungmoo, Routledge.
- Yoo, Chul-In (1995) Family and Prostitution in the Life Story of a Korean Woman Who Married an American Soldier, *Korean and Korean American Studies Bulletin*, vol.6 No.2/3 Summer/Fall.

<謝辞>

本稿は1999年6月26日、東京学芸大学で開かれた比較家族史学会のシンポジウム：『恋愛、性愛』で「韓国における処女性と貞操観」という題で発表し議論したものと、1999年7月21日広島国際センターで開かれたアジア塾（塾長：広島大学大学院国際協力研究科山下彰一教授）で「儒教社会韓国における貞操と政治」という題で発表したものに基づいて作成したものである。発表の時、多くの方々からコメントをいただいたことに感謝します。